
Fate/the lost chalice

STORM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / t h e l o s t c h a l i c e

【Nコード】

N 2 2 1 0 G

【作者名】

S T O R M

【あらすじ】

士郎たちの聖杯戦争から既に100年。ほとんどの魔術師から忘れ去られ、記憶の片隅に残る程度となった聖杯戦争。ある日、凜の子孫、遠坂涼は聖杯戦争が再び起こることを予知し、準備に明け暮れていた。そんな中、聖杯戦争など微塵も知らない士郎の子孫、衛宮志佳は新たなサーヴァントを呼び出すのであった。

F a t e O 忘れられた聖杯(前書き)

F a t e / u n l i m i t e d c o d e s が P S P で 出 る と の

とで、書きました。

プロローグはかなり短いです。

F a t e O 忘れられた聖杯

時は流れ。

最後の聖杯戦争から既に百年。

聖杯のことなど既に魔術師の記憶からも薄れていた。

あの過酷な夜の戦い。

あれがまるで初めから存在しなかったかのように。

剣を持つ者。

弓を持つ者。

槍を持つ者。

鎖を持つ者。

杖を持つ者。

陰を持つ者。

狂を持つ者。

そんな者がいたことなど、既に魔術師の記憶の片隅に残っている程度である。

聖杯は破壊された。

それだけで全てが片付いた。

・・・だが、聖杯は易々とは壊れない。

易々とは壊されてはくれない。

聖杯は己の目的のために何度も蘇り続ける。

そう、何度も・・・何度も・・・。

聖杯は蘇り続ける。

F a t e 1 平穩と騎士と(前書き)

世界観ぶち壊しまくりなような気がします。

F a t e 1 平穩と騎士と

鳥の鳴く声が聞こえる。

もう、朝みたいだ。

日曜の朝、衛宮家は今日も平穩。

もう100年以上も前からあるこの家はなかなかの大きさを誇っており、掃除をする方が大変だ。

現在、ここに住んでいるのは私、衛宮志佳のみ。

100年以上前はいつも賑わっていたという。

幾度か改装されたそうだけど私は元の形が分からないからなんとも言えない。

そして家のほかにあるのは道場と蔵。

なんでも蔵は死んだひいおじいちゃんがとても大切にしていたとか。その中に何かあるかはわからない。

鍵がかかっているから入ることすらできない。

道場にはいつも竹刀が置いてある。

私は毎朝そこで素振りをする。

素振りをしていると気が落ち着く。

別に剣道をやっているわけではないけど、小さい頃からこれが当たり前になっていた。

平日ならもう学校に行く支度を整えるところだけど、今日は休日。もう少し素振りをすることにした。

「センパイ！上がっていいですかー？」

私が素振りをしていると、かわいらしい男の子の声が聞こえた。

「星、おはよう。上がってもいいよ！」

毎日のようにやってくる幼馴染の間桐星。

親同士が親しかったために小さい頃から遊んでいた。

小さい頃は志佳ちゃんと呼んでいたのに、私が年上だから気付けばセンパイと呼ぶようになっていた。

そして幼馴染はもう一人いる。

「涼はそろそろ来るかな？」

「いつもの時間ならそろそろ来るけど、今日は何かあったのかな？」

もう一人の幼馴染、遠坂涼。

彼女の家は何かの名門らしく、いつも忙しそうにしている。

間桐家も元々は同じような家系だったらしく、星は「さびれてくれたおかげで楽だ」と言っている。

一応何か知ってはいるようだけど、「僕には関係ないから」と言っていて笑いながら流す。

私にも関係ないからそこまで追及はしない。

「涼ちゃんは何してるんだろうね」

「家にもなんか怪しいものがあるけど・・・遠坂先輩はそれ使ってるのかな」

お茶を飲んで平和を満喫しながら言う。

「いいわね、他人事のように平和にお茶を飲んで」

「あ、声掛けてから入ってよ」

「あんたらが平和を満喫してたせいで聞こえなかったんじゃないの？」

涼ちゃんはいつも怒りっぽい態度をとる。

昔から全く変わっていない。

「こっちは聖杯戦争の準備で忙しいってのに」

「ん、なんか言った？」

「な、何でもないわよ」

まあ、家の事情なんだろうね。

私には関係ないし、あまり首を突っ込まない方がいいかな。

「遠坂先輩、何言ってるの？ 聖杯戦争はセンパイにも関係あること
でしょ？」

「まあ、あるっちゃあるけどね」

え、私に関係あるの！？

「・・・なぜ？」

「まあ、あるというのはあなたの先祖・・・曾祖父あたりかな」

「僕たちの曾祖母もね」

それで親たちは親しかつたのかなあ。

「星もいずれ参戦することになるわ」

話が分からない・・・。

「あ、あの・・・何の話？」

「あ、そうそう。志佳、あなたもマスターになるわよ。恐らくセイバーがサーヴァントね」

はい？

マスター？

セイバー？

サーヴァント？

何それ。

「あの・・・マスターとかセイバーって何？」

「まあ、いいからついていらつしやい」

「あ、僕は勝手にお茶飲んでるから」

星が見送ってくれた。

「蔵に来て何するの？鍵ないよ」
そう、この蔵はひいおじいちゃんが死ぬ前に鍵をかけてしまったから開かないのだ。
それに鍵も行方不明。

「鍵ならあるわ」

涼ちゃんが何故か持っていた。
そして普通に開いた。

「な、何で持つてるの？」

「あなたの曾祖父が私の家に預けたのよ」

・・・預ける理由がよく分からないなあ。

「ここに聖杯戦争の準備を整えるためのものがあるわ」
中にはたくさんガラクタが転がっていた。

「・・・それで、どこにあるの？」

ガラクタが準備を整えるもの？

「・・・そう言えばあなたの曾祖父はガラクタいじりが趣味だったと聞くわ」

「それで、必要なものは？」

「・・・結論から行くわ。ないわね」

ええ、ないの！？

「・・・困ったわ」

涼ちゃんは頭を抱えている。

ふと、奥を見てみると一瞬何かキラッと光ったように見えた。

「・・・あれ、なんだろう」

頭を抱えている涼ちゃんの横を通り過ぎ、まるで捨ててあるかのよう
うに落ちていた剣を手取る。

その瞬間

。

「な、何これっ?」

「・・・令呪」

私の右手の甲に紋様のようなものが光り、浮き出てきた。

そして、後ろに誰かが立っていた。

その格好は西洋の騎士の様。

そして彼は私に行った。

「問おう。貴方が私のマスターか」

その後ろでは涼ちゃんが目を丸くしている。

「アルトリア・・・じゃない」

アルトリア?

「私はセイバーのサーヴァントとしてこの世界に呼ばれた。

もう一度聞く。あなたが私のマスターか」

セイバーのサーヴァントと名乗った男の人は、非常に背が高く、私
を見下ろしているようだった。

そして私の握っている剣を見つめている。

「その剣は私のものだ。だから貴方がマスターと見た」

「え、はい・・・私がマスターなんじゃないですか？」
意味も分からずそう答えた。

「了承した。私のことは今後セイバーと呼ぶがいい」

そう言っつてセイバーは私の持っている剣を指して言った。

「それを返してもらえないか？」

私は何も言わずに返した。

セイバーは自分の鞘にその剣を仕舞うと、少し微笑んだ。

「聖杯戦争が終わるまで、私は貴方に忠誠を誓おう」

それが私とセイバーの出会いだった。

F a t e 2 悪魔儀式の小さな鍵

「あんたの方が先にサーヴァントを召喚するとはね」
涼ちゃんが羨望の目で見つめてきた。

「いやあ、そんなに見つめられちゃうと恥ずかしいなあ」

「何照れてんのよ、別にそんな気はないわよ」

そのムツとした顔が涼ちゃんらしくもあるけどね。

「さてと、私も召喚してくるかな。ちよつと気になることもあるしね」

そう言つて涼ちゃんは去つて行った。

去つていく姿を見つめていた私にセイバーは話しかけた。

「マスター、お前のことは何と呼べばいい？」

「ねえ、貴方からお前に変わつてない？」

「意味は元々のほとんど同じだ」

そうなの？

明らかに「お前」の方が聞こえが悪いけど。

「まあ、いいけど。私の名前は衛宮志佳。呼び方は好きにして」

「うむ、ならば名前をそのまま使わせてもらおうか」

・・・成り行きでこうなつちゃったけど、何でこうなってんだっけ？

「質問、セイバーって何者？」

てかこの人どつから来たの？

「私はサーヴァントだ」

「説明が不十分すぎるよ・・・」

そもそもサーヴァントが何だか分からない。

英語苦手なんだよねえ。

「聖杯の助けによりマスターに召喚され、彼らに使役されることになった英霊を指す。そんなことも知らずに私を召喚したというのか？」

そもそも私が召喚したの？

さっぱりだよお。

「まあいい。私たちの存在意義は夜になれば分かるだろう」

「夜？」

「時が満ちるのを待て」

待て？

何故？

・・・まあ、星も知っているようだし、彼らの家系に関係があることなんだろう。

「ひとつ聞くが、お前はどれほど剣を使える？」

「剣？ 剣なんて竹刀を毎日振ってる程度だから全然使えないよ」

「お前は本当にダメなマスターだな」

う、うるさい！

「こつちだつてさっぱりわからないんだよ！」

「こんなマスターで勝てるのか？・・・いや、その昔無知に近いマスターを勝利に導いたサーヴァントがいると聞く。これは私への挑戦なのだろうか」

セイバーはひとりつぶつぶ喋りはじめた。

その言葉には私への厭味が沢山含まれていた。

「いい加減厭味言うのをやめてよ」

「ふ、確かに私も騎士だ。君主を貶すことは禁忌だが、あまりにお前が情けなくてな」

本当に厭味しか言わないね、こいつ。

セイバーだか何だか知らないけど私を変なことに巻き込まないでほしい。

つて、手にこんな変な模様付けられておいてもう巻き込まれるとしか言いようがないけど。

「センパイ、こんなところにいたの？」

星が手を振ってる。

「どうやら探していたみたい。」

「それってセンパイのサーヴァント？」

「そ、そうみたいだね」

「そうだ、私はシカのサーヴァント。クラスはセイバー」

「へえ、ちなみに真名は……って、言えないんだっけ。ごめん
本名……そう言えばなんて言うんだろう。」

「言えない掟でもあるのかな。」

「真名って言っちゃいけないの？」

「マスターになら教えても構わない。だが、それ以外のマスターに教えるということは弱点をさらすことになる。尤も、お前は簡単に口を滑らせそうだから、私もお前には教えないがな」

「そんなに口が軽そうに見えるか？」

「喧嘩売りすぎじゃないの、この人！」

「あつたまくるなあ」

「まあ、落ち着いて落ち着いて」

「でも！」

「それに前回の聖杯戦争でも勝ち残ったのはセイバーだし」

「え、本当に？」

「この人そんなにすごいの？」

「……この人じゃないけど」

「やつぱりこいつ凄くないんじゃないの？」

「でも呼ばれるのは英雄だからすごいよ、たぶん」

「あくまでも多分なんだね。」

「今は落ち着いて、もうお昼近いから料理でも作りますか」
少し怒りながらも、私は料理を作ることにした。

夜

今日は星が家に泊まった。

星は頻繁に家に泊まりに来るため、専用の部屋を用意している。
でも、あの騎士にはない。

「あなたはどうするの？」

「私は外でかまわない。別に寝る場所などどこも変わらんしな」

あ、そう。

よかった。

部屋は余ってるけど準備するのが面倒だったんだよね。

「それじゃ、また明日」

「ふふふ、そんな香気なこと言ってられるのか？」

へ？

「な、なんでさ？」

「血で血を洗う楽しい夜の始まりと言うのにもかかわらずな！今回の敵はどうやらキャスターのようだな」

セイバーの視線を辿っていくと、空に誰かが浮いていた。

「……ありえなくない？」

「それが、ありえるんですよ。僕のサーヴァントも呼ぶ？」

「え、わざわざいいよ」

「助けなど不要。私は聖剣の持ち主だからな」

セイバーが剣を抜く。

「話が早いな、セイバーのサーヴァントよ」

「私は何としてでもこの聖杯戦争に勝たねばならない。獲物がわざわざこちらに来てくれるということは、とてもありがたいことだ」

「ふふふ、残念ですが今回は顔を見に来ただけです」

セイバーはそんな事を聞かないようだった。

手にした剣を天に掲げ、キャスターを指した。

「私はここで貴様を討つ！」

セイバーはキャスターに飛びかかり、斬りつける。

「ちっ、マルバス！」

キャスターが何かの言葉を発すると、キャスターを捕らえたはずの剣に何かが咬み付く。

あれは……ライオン？

「ふ、だが、我が剣に斬れぬものなし！」

セイバーは剣を大きく振る。

するとライオンは真つ二つにされ、セイバーは地面に着地した。

「こつもあからさまに分かりやすい行動を取ってくれるとはな。おかげで貴様の正体がわかった」

え、誰？

さっぱりわからないんだけど。

「今回は引く。次は戦場で……来い、ヴァレフォル！」

うわ、今度はなんかよく分からない羽が生えた馬っぽいのに乗ってどっか行っちゃったよ。

何、あれ。

あれもサーヴァント？

「逃がしたか」

セイバーは剣を鞘に納めた。

「セイバーもあんなの出せるの？」

「バカか、私はキャスターではない。あれは恐らく宝具《悪魔儀式の小さな鍵》、ゲーティアの力だ」

ゲーティア？

何それ。

「もう分かっただろう、奴の正体が」

「・・・え？」

それを聞いたセイバーはあきれたように嘲笑った。

「それでもお前は魔術師か？」

そう言って蔵に向かって行ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2210g/>

Fate/the lost chalice

2010年10月9日11時44分発行